

日蓮聖人の書簡執筆についての統計

関 戸 堯 海

はじめに

日蓮聖人は積極的な布教活動をしたことで知られているが、特に精力的な執筆活動をしたことは、著作・書簡・図表が合計で約九百あることが示している。有力檀越の富木常忍は下総国守護千葉氏の有力被官（事務官僚）であり、日蓮聖人の真筆を嚴重・正確に保管したので、『立正安国論』『観心本尊抄』などの多くの真筆が現在に伝えられている。また弟子たちも大切に真筆遺文を保管した。このため真筆が数多く現存しており、真筆が完全に現存している著作、数行が現存している場合など、信頼性の高い遺文は六百を超える。

渡辺宝陽博士、小松邦彰博士の『日蓮聖人全集』全七卷（春秋社）には信頼性の高い著作・書簡を約二百八十篇収録しているが、書簡だけを取り上げて執筆の目的を集計することはきわめて難しい作業と考えられる。しかし、書簡執筆の目的を検討することを主眼として、あえて分類を試みてみた。

ころ、『日蓮聖人全集』約二百八十篇の中で約二百六十篇が書簡の性格を持つ遺文であると思われる。いうまでもなく今回の考察はあくまでも目安となる数値であると考えられるが、日蓮聖人の書簡がどのような目的によって書かれたかという問題について試論を提示してみたい。

『千日尼御前御返事』について

日蓮聖人の書簡の多くは信徒からの供養のお礼である。短編の「礼状」としての書簡も多いが、あわせて法門を教示している場合も多い。千日尼は佐渡の阿仏房日得の妻であるが、『千日尼御前御返事』は真蹟二四紙が佐渡の妙宣寺にあり、「佐渡国府阿仏房尼御前」と宛名が記載されるので「佐渡阿仏房御書」とも称す身延山から千日尼へ宛てた書簡。ここで『千日尼御前御返事』をみて、書簡執筆の目的について考えてみたい。

『千日尼御前御返事』の冒頭には、

弘安元年太歳戊寅七月六日、佐渡の国より千日尼と申す人、同じ日本国甲州波木井郷の身延山と申す深山へ、同じ夫の阿仏房を使として送り給ふ御文に云く、女人の罪障はいかがと存じ候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候しを、万事はたのみまいらせ候て等云云。

〔昭和定本〕一五三八頁・真蹟現存
とあり、夫の阿仏房が身延へ参詣したおり、千日尼からの書簡を阿仏房が持参して来たので、その返事を記しており、千日尼が女人成仏についての質問をしてきたことが分かる。

【『法華経』の概要】まず『法華経』の概要について

鳩摩羅什と申せし人、彼国より月氏に入り、須利耶蘇磨三蔵と申せし人に此の法華経をさづかり給ひき。その授け給ひし時の御語に云く、此の法華経は東北の国に縁ふかすと云云。此の御語をもちて月氏より東方漢土へはわたし給ひ候しなり。

〔昭和定本〕一五三九頁・真蹟現存
と鳩摩羅什が亀茲国からインドに入り、須利耶蘇磨三蔵から『法華経』を授かり、授ける時に須利耶蘇磨が「この『法華経』は東北の方向にある国に縁が深い」と鳩摩羅什に言ったので、インドから東方の中国へ『法華経』を伝えたのである等々と述べて、『法華経』がインドから中国を経て日本へと伝来したことや、『無量義経』四十余年未顕真実の文や『法華経』方便品・宝塔品・神力品などから引用して、『法華経』

が諸經典の中でも最もすぐれた經典であることを論じる。

【女人成仏】提婆達多品の「女人成仏」について

第五の巻に即身成仏と申す一経第一の肝心あり。譬へばくろき物を白くなす事漆を雪となし、不浄を清浄になす事、濁水に如意珠を入れたるがごとし。龍女と申せし小蛇を現身に仏になしてましましき。

〔昭和定本〕一五四一頁・真蹟現存
とあり、『法華経』第五巻の提婆品で、即身成仏という『法華経』の中で第一の肝心な法門が説かれたので、方便品ですべての衆生がみな仏に成ることが説かれたが、現実の証拠がなかった点について、これではつきりしたという。それは黒い漆を雪のように白くしたり、不浄の濁水に清浄な如意宝珠を入れてきれいにしようなものであって、龍女という小蛇を現身に即して仏になさしめられたことよって確証されたと述べる。

【念仏信仰を批判】日本国の人々は間違つた信仰を持つてゐることについて

されば日本国の一切の女人法華経の御心に叶ふは一人もなし。我悲母に詮とすべき法華経をば唱へずして弥陀に心をかけば、法華経は本ならねばたすけ給ふべからず。弥陀念仏は女人たすくる法にあらず。〔昭和定本〕一五四三頁・真蹟現存

とあり、日本中のすべての女性のなかで『法華経』の御心にかなつた人は一人もいないとし、わが悲母のために頼るべき

『法華經』を唱えず、弥陀に心をかけていたならば、母を助けることもできないと述べ、弥陀念仏は女性を助ける法ではないとする。

【諸天の守護】多宝仏・十方の諸仏・菩薩・二乗・梵天・帝釈・四天王・日天・月天等は、仏前で法華經の行者を守護することを誓っているのに、迫害にあうのは日蓮聖人が間違っているのだろうかと問いかけて、

こゝに日蓮願て云く、日蓮は全誤なし。設ひ僻事なりとも日本國の一切の女人を扶んと願せる志はすてがたかるべし。何かに況や法華經のまゝに申す。而るを一切の女人等信ぜずばさてこそ有るべきに、かへりて日蓮をうたする、日蓮が僻事か。

〔昭和定本〕一五四四頁・真蹟現存
と、日本中のすべての女性を扶けようと願って立てた志は捨てがたいものであり、『法華經』に説かれている通りに申し立てているのだから、必ず諸天の守護が得られることを述べている。

【千日尼は母の生まれかわりか】佐渡流罪の窮地を救つてくれた千日尼は悲母の生まれかわりのように思えるとして、地頭々々等、念仏者々々々等、日蓮が庵室に昼夜に立ちそいてかよ（通）う人あるをまどわさんとせめしに、阿仏房にひつ（櫃）をしをわせ、夜中に度々御わたりありし事、いつの世にかわすらむ。只悲母の佐渡の国に生れかわりて有るか。

日蓮聖人の書簡執筆についての統計（関戸）

〔昭和定本〕一五四五頁・真蹟現存
と、地頭という地頭、念仏者という念仏者が、日蓮聖人の庵室に昼夜に立ち添って、尋ねて来る人々を迷わせ、日蓮聖人に会わせないように妨害しているなかで、千日尼は夫の阿仏房に櫃を背負わせて、夜暗にまぎれたたびたび尋ねて来てくれたことは、いつの世になつても忘れることはできないと述べ、日蓮聖人の母が佐渡の国へ生まれかわつてこのようにしむけてくれていると思えるという。

【身延の三度の訪問に感謝】遠く身延へ阿仏房が三度も来訪していることについて、

去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五ヶ年が間、此山中に候に、佐渡の国より三度まで夫をつかわす。いくらほどの御心ざしぞ。大地よりもあつく大海よりもふかき御心ざしぞかし。

〔昭和定本〕一五四五頁・真蹟現存
とあり、人間というものは遠く離れてしまうと、つい疎遠になつてしまうものであるが、それなのに去る文永十一年（一二七四）より今年弘安元年（一二七八）までの五か年の間に、身延山へ佐渡の国から三度も阿仏房を旅立たせられたことは、さながら大地よりも厚く大海よりも深い御心ざしであるとして、靈山浄土にも来訪するようにと述べる。

【十三回忌の供養】尼の父の十三回忌の供養に錢一貫文が贈られたことに御礼を述べ、

日蓮聖人の書簡執筆についての統計（関戸）

御消息に云く、尼が父の十三年は来る八月十一日。また云く、
ぜに一貫もん等云云。あまりの御心ざしの切に候へば、ありえ
て御はしますに随ひて法華經十巻をくりまいらせ候。

〔昭和定本〕一五四六頁・真蹟現存

とあり、あまりに御心ざしが尊いので、手元に置いてある
『法華經』十巻本を贈呈することにするという。

〔一谷入道の死去の報について〕佐渡の一谷入道が亡くなっ
たことについて、

さわ（谷）の入道の事なげくよし尼ごぜんへ申しつたへさせ給
へ。〔昭和定本〕一五四七頁・真蹟現存

と述べ、深く哀悼の意を表している、亡くなった入道の尼
御前にお伝え願いたいとする。

このように『千日尼御前御返事』についてみても、一篇の
書簡にいくつもの内容が込められているが、ここでの主眼は
千日尼の質問に答えた「女人成仏」にあると捉えたい。

書簡執筆の目的について

『千日尼御前御返事』を検討したのと同様な作業を重ねる
と、日蓮聖人が書簡を書いた目的については、おおむね以下
のように分類できると思われる。

①『立正安国論』に関連して（十二篇）『金吾殿御返事』（文
永七年）等

日蓮聖人は文応元年（二二六〇）に『立正安国論』を鎌倉
幕府に上呈した。『立正安国論』では災難の原因は民衆が釈
尊の本意である『法華經』ではなく、念仏などの他宗派を信
仰していると批判した。このため、『立正安国論』上呈を契機
として度重なる迫害を受けることになる。日蓮聖人にとって
『立正安国論』は、初期の重要な著作であるが、『立正安国論』
に関連する十二篇の書簡が文応元年以降にみえる。

②他の遺文に関連して（五篇）『正当此時御書』（文永十年）等
『観心本尊抄』など他の著作に言及している書簡が弘長三
年（二二六三）以降数篇ある。

③典籍の収集を依頼（五篇）『十住毘婆沙論尋出御書』（正元
元年）等

参考書籍を持つてくるように弟子に依頼している。このよ
うな書簡は早い時期からみえ、『立正安国論』の執筆などの
研究活動のために書籍が必要だったことが分かる。

④法難について（十七篇）『土木殿御返事』（文永八年）等

当時は蒙古襲来の危機が迫っていた。幕府は国内を平穩に
することに努力していたが、日蓮聖人の教団は大きく伸張し、
同時に他宗派からの厳しい批判があった。静観できなくなっ
た幕府は、日蓮聖人を逮捕し佐渡島に流罪した（文永八年）。
このころ、流罪に関する書簡が多くなっている。弘安二年（二
二七九）には熱原で弟子と信徒が悲惨な迫害にあつており（熱

原法難)、弘安二年以降には、この法難に関して弟子を励ます書簡がある。

⑤他宗との法論について(六篇)『行敏訴状御会通』(文永八年)等

弟子や信徒の中に他宗派と論争する者がいた。日蓮聖人は詳細な注意を彼らに送っている。誤解を招くことが多いので、私的な論争は避けるように弟子に教示している。

⑥現況報告・草庵での活動について(十七篇)『庵室修復書』(建治三年)等

文永十一年(二二七四)に日蓮聖人は身延山に入山した。生活の様子を知らせる書簡。

⑦日本の動静・自然災害・蒙古問題(十三篇)『大風御書』(弘安四年)等

身延山から送られた書簡には日本の動向・自然災害・疫病について書かれている。

⑧新年の挨拶(二篇)『春の始御書』(弘安五年)等 新年の挨拶の書簡。

⑨信仰生活・法門教示(三十九篇)『宝軽法重事』(建治二年)等

信徒が贈った供養の品には信仰生活に関する質問が添えられることが多かった。

⑩女人成仏(九篇)『法華題目鈔』(文永三年)等

日蓮聖人の書簡執筆についての統計(関戸)

『法華經』の提婆達多品第十二には女人成仏が説かれるが、女性に宛てた書簡には女人成仏に言及している例がある。女性からの質問に答えたと思われる。

⑪他宗批判(七篇)『太田殿許御書』(文永十二年)等

他宗を批判する書簡がある。他の宗派から改宗してきた信徒に宛てたと考えられる。

⑫問注の心得(二篇)『問注得意鈔』(文永六年)等

弟子や信徒に問注所での細かい注意を与えている。

⑬信徒の病氣(十五篇)『南條兵衛七郎殿御書』(文永元年)等

病氣の信徒に宛てた書簡が多くある。日蓮聖人は『法華經』の信仰を持つことと、医学的な治療を受けることを彼らに勧めている。

⑭親しい人を亡くして(二十篇)『上野殿母尼御前御返事』(弘安三年)等

身近な人を亡くした信徒を慰める書簡が多い。最愛の人を失った嘆きが知られる。

⑮家族の問題(十四篇)『兵衛志殿御返事』(弘安元年)等

家族の問題について書かれた書簡がある。池上兄弟は信仰の問題で父親に勘当されたが、日蓮聖人の指導で父の信頼を回復した。

⑯訪問や供養に対する御礼(四十七篇)『十字御書』(弘安元年) 信徒の来訪を感謝する書簡が多くある。身延山を訪れる信

徒が多かったことが分かる。

⑰仏事法要・追善供養・厄年（十三篇）『木絵二像開眼之事』（文永十年）等

仏事について指導する書簡が多くある。故人の供養の法会について語る例がいくつかみえ、厄年について質問してきた女性がいたことも分かる。

⑱仕事の悩み・主君との関係など（十篇）『崇峻天皇御書』（建治三年）等

仕事上の悩みを指導した書簡がいくつかある。主君と家臣の関係による悩みが多い。

⑲金銭の悩み（三篇）『二谷入道御書』（建治元年）等

信徒にお金を用意している例がある。佐渡で日蓮聖人に旅費を借りた女性がいた。

⑳その他『忘持経事』（建治二年・一二七六）

富木常忍は大切なお経を忘れてしまい、日蓮聖人に「日本第一の忘れ物の人」と称されている。また、着物を送って欲しいという日蓮聖人の依頼状もある。

おわりに

以上のように、日蓮聖人が弟子や信徒たちの色々な質問について親切・丁寧に法門を教示していることがわかる。書簡の多くは供養についての礼状である、礼を述べるにとどまる

手紙が多い一方で、追善供養などの仏事や、法門を教示したり、信仰生活のありかたや、故人へのお悔やみ、身延の草庵での生活の報告など、多岐にわたる内容が示されていることが分かる。さらに書簡を詳細に検討していくことの必要性が痛感される。

【参考文献】渡辺宝陽・小松邦彰編『日蓮聖人全集』（春秋社）、渡辺宝陽『日蓮の手紙』（筑摩書房）、北川前肇『NHKこころをよむ 書簡からみた日蓮』（日本放送出版協会）、上田本昌『日蓮聖人における法華仏教の展開』（平楽寺書店）、庵谷行亨『日蓮聖人のこころ』（日蓮宗新聞社）、宮崎英修『日蓮とその弟子』（毎日新聞社）、高木豊『日蓮とその門弟』（弘文堂）、中尾堯『日蓮宗の成立と展開』（吉川弘文館）、今成元昭『日蓮聖人の書簡について―解釈上の二三の問題―』（立正大学日蓮教学研究所紀要二〇号）等。

〈キーワード〉 日蓮・書簡・遺文

（立正大学日蓮教学研究所研究員・文博）

41. The Lotus Sutra and Dōgen

Eryū KAWAGUCHI

42. *Shōbōgenzō hokketenhokke* and *Rongi*

Takao ISHIJIMA

In the “*Shōbōgenzō hokketenhokke*” (正法眼藏, 法華転法華) we find the expression “*yokuryō shujō kai ji go nyū*” (欲令衆生, 開示悟入). It has been thought that Dōgen (道元) quotes this expression from the “*Hokekyō hōben-bon*” (法華經方便品). However, I wondered about this, and investigated a number of sources. As a result, I believe that Dōgen (道元) quoted this expression from the *Shoulengyan yishuzhu jing* (首楞嚴義疏注經) of Zixuan (子璿).

43. Nichiren Shōnin’s Propagation of the *Lotus Sutra* through his Writings

Gyōkai SEKIDO

Nichiren’s attitude was to vigorously promote his ideas. Focusing on engaging in as much communication as he could with his followers, he was a prolific letter writer, thus producing a great volume of writings. A collection of about 280 of his authenticated works are contained in the volume *The Complete Works of Nichiren Shōnin*, co-authored by Dr. Hoyo Watanabe and Dr. Hosho Komatsu. This volume is upheld as the standard for present-day research on Nichiren Shōnin. There are about 260 works in the collection that are classified as letters, although some of these are quite lengthy and could be considered as treatises or theses. My purpose for this presentation is to try to classify these letters by purpose and subject.

44. On the Disclosure of the Core Transmission Teachings of the Taiseki-ji School Found in Nichikan’s Writings

Mikio MATSUOKA